

第一回 おんかつアウトリーチカフェ 報告書

2014年6月17日、地域創造会議室にて、第一回おんかつアウトリーチカフェが開催されました。この事業は、アーティストが一堂に会して情報交換をするとともに、世代を超えた交流を深める場として実験的に設けられた機会です。初回のゲストスピーカーは、数多くのアウトリーチ経験を有し、その多彩な活躍で知られるピアニストの中川賢一氏。アウトリーチの具体的な実践方法や、アウトリーチに対する考え方などがスライドを交えてパワフルに紹介されました。

ゲストスピーカー：中川賢一氏（ピアニスト・指揮者）

進行：児玉真氏（地域創造プロデューサー）

参加者：アーティスト（11名）、ホール職員、コーディネーター 他

内容概略：

1. 18:30- 趣旨説明（児玉氏）
2. 18:40- お話（中川氏）
3. 19:30- 自由討議（参加者）
4. 20:00- 懇親会

1. 趣旨説明（児玉氏）

- ・ アーティストが集合して話し合うことは、今回初めての試み
- ・ 特に「おんかつ支援」からは自力でやらねばならず、互いの活動を知る機会も少ない
- ・ 自由な議論の場で情報交換をしてほしい（手法、工夫、悩みなど）



2. お話（中川氏）

「最初は、赤ちゃんの状態から」

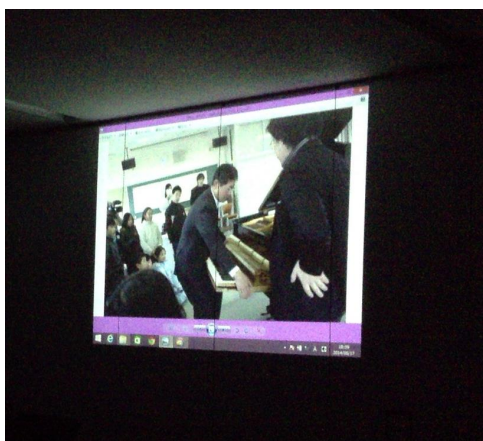
おんかつに10年間携わっているが、1年目は1件のみしか依頼がなかった。最初は、いきなり教室に放り込まれた状態で戸惑うことばかり。次第に共演の機会にも恵まれ、5年目に入る頃ようやくソロでの依頼も増えてきた。初めの頃は、実験の繰り返し。ピンポン球を使ったり、全員にグリッサンドを体験してもらったり、アイデアを最大40~50個用意した。この中から次第に、使えるもの・そうでないものを選別していくことになった。

「おんかつで人生が変わった」

共演者との出会いは貴重だった。共演者のアイデアを身近に見て吸収していくことができ、大きなメリットとなった。アウトリーチはもちろん文化振興のために重要な場だと思うが、アーティストである自分の成長のためにもとても有意義であると感じる。そこには、多くの人とつながる機会があり、自分が生き生きする瞬間でもある。

「手法① 楽器の仕組み・アクションカットモデル」

ピアノの周りに集まって、ピアノの構造を間近で見ってもらったり、触れて振動を感じてもらったり、オルゴールを当てて響きの違いを聴いてもらったりする。ハンマーにどのように力が伝わるか見せるため、アクションカットモデルを使うこともある。これはメカ好きな男の子などに特に受けが良い。ピアノを解体する時には、可能な限り調律師さんに頼むようにしている。それには二つの理由があり、一つはもし壊してしまった場合、責任問題になること。もう一つは、自分一人で何でもするのではなく、助けてくれる人をどんどん巻き込む活動にしたいから。



「手法② 絵画で即興」

子どもたちとのコンタクトツールとして、「絵」を使う手法がある。ストラヴィンスキーの『春の祭典』などを題材に、自由な発想で絵を描いてもらう。あるいは、子どもたちに描いてもらった絵を笛の合図で順に掲げてもらい、それを見て即興することで作曲の瞬間をみってもらう。ホールコンサートで、子どもたちの絵をスクリーンに大写しにして演奏をすることもあ

「手法③ アナリーゼ」

クラシック音楽は、決して簡単なものではない。そもそも難しいものであるが、伝統的に受け

継がれているのにはそれだけの良さがあるということ。だからこそ「なんちゃってクラシック」という考え方は受け入れ難く思う。しかし、難しいものを気軽に聴く方法はあるので、どう聴いてもらうか、どう伝えるかが肝心である。耳なじみがないものをアナリーゼしながら少しずつ演奏し、時には旋律を歌ってもらい、段々と耳なじみにしてしまうという方法も有効。

「手法はどんどん真似してよい」

他にも、数台のピアノを使って即興を实践してもらったり、地域ゆかりのオペラをつくったこともあり、アウトリーチの手法は様々である。たとえ他人のアイデアであっても、別のアーティストが行なうと全く異なったものになるため、人がやっていて良いと思ったものは、どんどん取り入れて構わないと思う。元々人からいただいたアイデアでも、今はある程度自分なりの形になってきているが、自信を持ってできるようになるまでには、様々な試行錯誤が必要だった。



「つまるところは、演奏の腕前」

ピアニストである以上、まず演奏で心をつかめないといけない。特に導入は極度の緊張に襲われるため、絶対に失敗しない曲をプログラムの頭にもってくるようにしている。特に、子どもは演奏の善し悪しをすぐに見抜くためシビアである。演奏する側がパワーをもって接しないとすぐに飽きてしまうし、アウトリーチは距離が近いので、その反応も直に伝わってくる。また、例えばピアノの状態によっては、鍵盤が上がらないというアクシデントもあった。そのような厳しい環境下での演奏を余儀なくされても、絶対に自信を持って弾ける曲がレパートリーに必要である。また、静かな曲をプログラムに取り入れることも、集中して音楽を感じてもらうための効果的なシーンを作り出せる。小手先のネタだけではなく、結局はピアニストとしての腕前、つまり演奏で凄いとってもらわないとアウトである。

「人を巻き込む力」

知恵とエネルギーを絞り出して、何かできそうだと思うことはどんどん発言していくことが大切。その熱意が伝われば、スタッフの協力を得ることができる。ホールとの信頼関係ができると、実験的なこともやらせてもらえるようになった。また、アウトリーチで学校を訪れた際には、先生をヒーローにすることを心がけている。アーティストは、謂わばエイリアンとしてやってきた外部の人間にすぎないが、先生を巻き込むことで子どもたちとの距離もぐっと近づく。また、

アウトリーチが親子の会話のきっかけとなれば嬉しい。

「悩みがない人は成長しない」

アウトリーチは近年ますます定着してきているが、アウトリーチに王道はない。アーティストそれぞれが多様であり、結局マイウェイを模索していくしかない。自分の中の鉄板プログラムをつくるのに8年～10年を要した。やりたいことはたくさんあるが、実現できることは少ない。しかし、やりたいことは多ければ多い程良い。最後は「いかに苦勞するか」その経験や数がものを言う。

3. 自由討議 (参加者)

?アウトリーチのアイデアはどこからおりてくるのか? (児玉氏より)

「現代音楽」はアイデアの源になっている。NHK 市民大学で放送された遠山一行氏の講座で衝撃を受けたことを覚えている。水槽の金魚の動きが音楽に?! その発想の転換がとても面白いと感じた。図形楽譜、例えばクルターク György Kurtág(1924-) の『遊び *Játékok*』等はよく使う曲で、意外なものがアートにみえてくる瞬間は興味を引く。また、アナリーゼもとても重要。アナリーゼとは、音楽のどこの引き出しをあけるか、全く新しい言語の意味を翻訳して紹介することだと思う。(中川氏)

?カメラを使った、大きなホールでのアウトリーチ?

今までクラシック音楽を身近に感じてもらうため、より小さな空間で少人数に密度の高いものを、という方針で仕組みがつくられてきた。ホールでのアウトリーチは、その逆転の現象ともいえる。どのように実現可能にしたのか? (児玉氏より)

ビデオカメラとプロジェクターを使って、舞台上の楽器の細部を同時に投影する等、ハードの部分でも可能になってきた。アウトリーチばかりが注目されている昨今の状況では、ホールの存在が忘れられがち。体験型はホールでは人数が多すぎてできないと一般的には考えられるが、500人を舞台にあげたこともある。その時は演奏中のピアノの振動を感じてもらうため、ムソルグスキーの『展覧会の絵』から「キエフの大門」を6回続けて演奏した。当然、体力がないと無理だが、不可能ではない。(中川氏)

?ノーと言える幅をもつこと? (児玉氏・中川氏・参加者討議)

自分の楽器を持ち運べないピアニストも、楽器の側で聴いてもらうという手法を開発する等、アウトリーチでできることの幅が広がった。時には、ホール側から様々なアイディアの提示を受けることもある。アーティストにとっては、どうしても譲歩できないところは、ノーと言えることも必要かもしれない。だが当然それ以上に、これはできるということをたくさん用意しておく必要がある。例えば、学校の先生から伴奏を録音してもらえませんか？と依頼され、どうするか、悩ましいことがあった。決められたアウトリーチ枠の終了後に個人的なお願いをされるのは、本来は仕事上難しいことである一方、プレゼントとしてボランティアでもすべきではないかという意見も出た。どこまでできるか、というのは個人の問題で線引きは難しい。アウトリーチ中に校歌を用いる例も増えてきているが、ただやれば良いのではなく、どういう目的で校歌を取り入れるのか、共演のため？距離を近づけるため？その位置付けや使い道はよく考えなければならぬ。



2014/06/24 (記録：田辺沙保里)